
白いセーター

雪野 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白いセーター

【Nコード】

N4770B

【作者名】

雪野 空

【あらすじ】

普通の18歳の女の子『小笠原ひなた』の恋の話し。色んな人と付き合ったがどれもすぐに破局してしまい、将来について不安に思うひなた。しかし、バイト先で知り合った8つ上の龍樹に恋をし、自分が変わっていくことに気がきます。しかし、龍樹には彼女が…。前途多難なひなたの恋はうまくいくのでしょうか？！

第1話：クリスマス前に（前書き）

どこにでもある話：実は私（作者）の現在の彼氏との実話です。読んで頂けたら幸いです。

第1話…クリスマス前に

これは冬に始まった恋の話。

クリスマス直前の12月23日。私、小笠原ひなたは3つ上の自己中な彼氏と別れた。：1ヶ月ももたなかったかな。

私はいつもこうだ。今まで何人かと付き合ってきたけど、どれも3ヶ月程度で破局。たぶん原因は、素の自分を見せれないこと。

ぶりっ子って言うほどかわいこぶってるわけじゃない。けど、自分の嫌な部分とか駄目な部分は絶対見せられない。

私にはキャラってもんがあるし、そのキャラを見て私を好きになってくれてるんだらうって思うと：怖くて本当の自分を出せない。『しっかりしてる』とか『頼りになる』とか：そりゃ、言われて嬉しくないわけじゃないけど、私だって他の女の子達みたいに甘えたり、頼ったりしてみたいよ。そんな感じで付き合ってるもんだから、いつも疲れて別れちゃうんだよね。

まあ、それで今回リードしてくれるような人と付き合っただけで：自己中過ぎてついていけず、失敗。こんなんでいつか誰かと永遠を誓えるのかな：。ちよっと心配。

「ひなたちゃん、結局あいつと別れたの？」

そんなことを考えてぼけっとしていた私は突然声をかけられてビクッと肩を揺らした。

「：龍樹さあん。また終わっちゃいました。」

残念そうに言う私の頭をぼん、と叩いて龍樹さんはそっと笑った。龍樹さんは私が今バイトをしているガソスタの社員さん。確か歳は私の8つ上：26歳かな。私の良き相談相手であり、お兄さんの存在の人。それで、この時私は龍樹さんのことを純粹に仕事場の先輩としか見てなかったんだ。そう。この時は、ね…。

第2話：不覚

「おい、ひなたん飲むペース落ちてきたんでねえのお？」

「絶対みんな飲み過ぎですってえ。」

そう言っただけで隣の座る加藤さんの肩を叩いた。今日は仕事が終わった後、ガソスタのみんなでカラオケに来た。

てか、みんな歌うより飲んでる…？ 一人涼太さんだけはお酒が飲めないからって歌いまくってるけど。

「ひなたちゃんも何か歌え。」

「ええー、恥ずかしいから先に龍樹さんが歌って。」

「大丈夫や。俺は今からだから。」

龍樹さんも若干ハイになってるみたい。私は文句を言われないうちに適当に曲を入れた。

「何、この歌誰が入れたんですか？」

ふと、画面に目をやるとそこには私の好きな歌の題名が表示されていた。

思わずマイクを持ってる人を確認する。

：龍樹さんだ！てか、上手い。

私、歌上手い人弱いんだってばあ…。

別にこの程度で人を好きになるわけじゃないけど。…まあ、きつかけになったりはするんだよね。でも！龍樹さんは絶対にない。この前聞いたんだ、涼太さんのお姉さんと付き合ってるって。別に嫉妬も何もなかったし、どうでもいいことなんだけど。…今だけはかっこいいって思っても罰は当たらないよね？

「意外とひなたちゃん歌うまかったなあ。」

「意外ってなんですか。」

帰りの車の中、後部座席に座っていた私はぶうっと頬を膨らませた。
「はは。またみんなで行きてえなあ。」

「うん、また連れてってくださいね。」

私が座席の間から顔を出して言う

「おめえは連れてかねえ。」

と運転してる涼太さんがにやにや笑いながらつつこんだ。本当にこのバイト先は楽しくてしょうがない。

「今日はひなちゃんとの失恋パーティーだからな。」

「失恋したんじゃないくて、私からフったんです。」

「だから最初からやめとけって言ってたべ。」

「うっ。」

：確かに。いろいろ龍樹さんには相談してて、やめた方がいいって言われてたんだよね。その場の雰囲気流されてあの人を拒めなかった私が悪いんだ。付き合うことにしたって龍樹さんに報告したとき、呆れたような顔されてショックだったの覚えてる。だから次は龍樹さんの意見はしっかり聞いておこうって思ったんだ。てか、こうやって改めて考えてみると龍樹さんの存在って大きいな。

「なんだ？ 静かになった。」

「あっ、考え事してた。」

「大丈夫だ、ひなたちちゃんならすぐに次が見つから。ほら、涼太とかいるべ。」

いたずらっぽく笑うと、龍樹さんは涼太さんを指差した。

「ぜってえ、やめてくれ。」

さぞかし嫌々そうに涼太さんは言う。

「ひどーい。」

私は運転席を後ろから蹴り飛ばした。私だって涼太さんより龍樹さんの方がいいもん。：なんて不覚にも思ってみたり。彼女持ちの人好きになるなんて絶対嫌だけど。

第3話：恋の始まり

『失恋パーティー』と題した飲み会以来、ガソスタのメンバーで遊びに行くコトが多くなった。そうやっているうちに私は、すごくかっこいい人達に囲まれてるんじゃないかって気付いたんだ。

加藤さんは意地悪で、でも気配り上手でちょっと気分屋。

結婚してるけど魅力的だなあって思う。

涼太さんは私の1つ上なのに私なんかよりずっと大人で、クールだけど実はかわいって感じで母性本能くすぐられる。龍樹さんは精神的に落ち着いてて、頼りになるお兄さんみたいな人。癒されるんだ。あー、迷っちゃう！…なんちゃって。そういえば、みんな魅力的だけど恋愛対象として見たことないなあ。

私はそんな事を考えながら裏の乾燥機にタオルを取りに行った。意識してみんなを見てみるといつもより3割増でかっこよく見える。…って単純過ぎかな？

「あ、何だ先に取りに来てたのか。」

一緒にタオルを取り出しながら龍樹さんは言う。

「びっくりしたあ。さりげなく入ってきますね。」

そう言ってくすくす笑っていると、突然龍樹さんに

「動くな。」

と言われ、私はびっくりして固まる。すると、龍樹さんは私の髪に手を伸ばした。そっと触れられて私は思わずドキッとする。

「タオルの糸か？」

ピンクの糸を親指と人差し指で摘んでじって見る。

「…あ、ありがとうございます！」

何だか恥ずかしくて、思わず私は他人行儀にお礼を言っていた。そんな私を見て龍樹さんはやっと笑う。そしてかご一杯になったタオルを持って、一人私を残しみんなのもとへと行った。

ねえ、単純過ぎるよね神様。そっと触れられた手が大きくて、優しくてドキドキしたなんて：見透かされたような目に、どうしようもなくなったなんて：言えないよ。

こうして一瞬にしてお兄ちゃんから男の人になってしまったんだ。龍樹さんっていう存在が。

第4話…チャンス

『好きかもしれない』そう思ったら、もう終わりだった。毎日考えてどんだん気になっちゃって…こんなはずじゃなかったのについていとも思う。龍樹さんの言葉が、行動が全部ドキドキして止まらない。彼女がいるってわかってるのに、止められない。

せっかくバイトが休みだっていうのに、龍樹さんのことばかり考えて、私は布団の中で唸ってた。私の唸り声の合間に着信の音が聞こえる。布団から手を伸ばし携帯を開いてみる。『龍樹です』題名にそう入っていた。

「えっ!？」

びっくりして私は布団から飛び出る。

そういうば仲はよかったけど、アドレス知らなかったんだ…。

本文には『インフルエンザになってしまいました。』

2時くらいからでいいんで代わりに出勤してもらえませんか？店長にはもう言っております。

』と入っていた。

龍樹さんのことを心配すると同時に私の中の悪魔が囁いたんだ。

『ここがチャンスだ』って。私はすぐに返信のメールを打った。『わかりました、ゆっくり休んでください。今度ご飯おごってくださいね！笑』送った後少し恥ずかしくなったけど、私は急いで準備を整えた。冗談にもとれるし、変な空気になったらごまかせばいいや！そんな気持ちでいると、龍樹さんからのメールが。『なんでも言うこと聞きます！』見た瞬間笑ってしまった。龍樹さんらしいって言うか…可愛いなあ。何でもってホントに何でも聞いてくれるのかな？そんな事を考えてたもんだから、またまた悪魔が登場して囁いてきた。『1日だけ彼氏としてデートしてもらえば？』

第5話：デート（前書き）

いろいろありまして、更新遅れました←←また、どんどん続きを書いていきたいので、読んで感想を頂けたらうれしいです（*σ∀σ）

第5話：デート

神様、仏様、おてんと様。どうか今日だけ目をつむっていてくださ
い…。

「お邪魔します。」

「おお。おはよう。」

私がさりげなく車のドアを開けて入ったのに、龍樹さんは妙によそ
よそしかった。

「…。」

会話も浮かばずただ黙っていると、ちらっと私を見た龍樹さんと目
が合う。びくっとなって目を反らす龍樹さんを見て、思わず私は笑
ってしまう。

「なんですか？」

「いや、なんか緊張するべ？」

「そうですか？いつもどおり、いつもどおり。」

もちろん、私のほうが緊張してるんだろうけど、強がってそんなこ
とを言ってみた。

本当にデートすることになるなんて自分でもびっくり。インフルエ
ンザから復活した龍樹さんに『どこに行きたいですか？』って言わ
れて、私は嬉しさのあまりトイレでガッツポーズしちゃったわけ。
話し合いの結果、水族館に行くことに。龍樹さんは私の気持ちに気
付いてて、今日遊ぶことにしてくれたのかな…？

「何、にやにやしてるんだ？」

「楽しみでににこしてるんです！」

私は"ににこ"の部分強調して言う。

「てか、あたしと遊んで大丈夫ですか？」

「えっ、なんで？」

「彼女さん。」

自分で言っただけで少し切なくなつた。最初からわかつてたことだし、しようがないんだけど。

「大丈夫ではねえなあ。だから、みんなには秘密にしてな。」

そう笑つて言う龍樹さんに、思わず抱き着きたくなつてしまつたけど、そこは自分を抑えることができた。彼女だったらなあ…。

「今日は1日限定彼氏だからな。ひなたんの言うことなんでも聞きますよ。」

「うん。…ごめんなさい。別に風邪ひきたくてひいたわけぢやないのに、あたしに付き合わせちゃつて…。」

俯きながら言う私の頭を撫でながら、龍樹さんは

「迷惑だったら最初から断つてから。」

と言つた。それってどういう意味?…期待しちゃうよ。

第6話：思い出に：

水族館に行つて、イルカと戯れて（ガラス越しだけど）ラッコとにらめっこして（ラッコにはしかとされたけど）：隣にはずつと龍樹さんがいてすごく楽しかった。私が馬鹿するたびに笑ってくれる、からかってくれる。いつもより近い龍樹さんとの距離。ああー、ドキドキしてしょうがないよ。

帰りの車の中、突然龍樹さんは私に問いかけて来た。

「なんで俺と遊ぼうと思ったの？」

「えっ?!」

私は内心焦りまくった。普通、このタイミングでそんなこと聞く？私はバイトを辞めるまで、自分の気持ち隠し通すつもりなんですってえ…。

「いやっ、実はあたし恋愛について悩んでてえ。龍樹さんにまた相談しようかなあ、なんて思つて。」

「ふうん、じゃあ告れ。」

「早っ!もつと話聞いてからにしてくださいよ。」

なんとかごまかせたみたいで、私はほっと息をつく。意外と私って嘘が上手なんじゃない？

「告白しないの？そいつに。」

そう言われて私は言葉に詰まった。言いたいつて気持ちは溢れそうなくらいあるのに、それができないってのはすごく辛いんだ。

「…今はまだ言わないです。その人のことすごく好きだから。」

「…なんで？好きなら当たって砕けろや。」

「ううん。その人、彼女いるし。ほら、例えば龍樹さん告白されたりとかしたら困るでしょ?」

「困る…うーん。嬉しいことは嬉しいんじゃない?つーか、告白するのに相手の気持ちばかり考えてたらダメや。」

私は喉まででてきた言葉を、あと少しのところで飲み込む。好きって言いたい。でも、言ってしまったらこれから先気まづくなっちゃうし…。とりあえず今日だけは、彼氏として私といってくれるんだから、台なしにしたくない。

「本当にその人のこと好きだなあ。あたし、その人なら思い出にエッチしたいもん！」

私は今までの雰囲気蹴飛ばすように明るく言った。

「激しい愛だなあ。」

龍樹さんも私に笑いかける。

「今時の女子高生はこうじゃないとね。」

「えっ、小学生じゃないの？」

「チビだからって子供扱いするなあ！あたしだってもう立派な大人の女なんだから。」

私が怒ってそっぽを向くと、龍樹さんはぼそっとうつぶやいたんだ。

「わかってるよ。」

第7話：告白

ヤバイ：飲み過ぎ：思考回路が…。

「ひなたちゃん、もう飲まないほうがいいんじゃないの？」

「いや、今日は飲むって決めてたんです！止めるなあ。」

私は持っていたグラスをドンッとテーブルに置く。今、お酒は2杯目。けれど、酔いはかなり回ってきてた。龍樹さんは運転があるからって1杯しか飲んでないけど。

「：何してんの？」

座敷で向かい合って座っていたはずの私は、いつの間にか龍樹さんの隣に移動してきていた。

「う？」

「いや、だから、なんで隣にいのって…。」

「ああー、あたしが隣にいるのが嫌なんだ。そうなんだ。はいはい。」

私は四つん這いになって元の位置に戻る。龍樹さんは少し困惑した様子だ。

ごめんね、龍樹さん。困らせたいわけじゃないんだけど…。

「すねんなよー。」

そう言われても私は頬を膨らませたまま、そっぽを向いていた。

「こっちに来たいの？」

目は合わせないで、首だけ縦に1回振る。

「何で？」

「：だって、今日1日あたしの彼氏だよ？だから、何してもいいの。」

酔いに任せてそんな事を言う私に、龍樹さんは真剣な顔で問いかける。

「ちょっと待て。お前の好きな奴って誰や？」

「…。」

私はびっくりして酔いが一気に覚めた。体が凍り付く。『どうしよう、どうしよう』って頭の中でリフレインしてる。

「ひなたちゃん？」

私はゆっくりと龍樹さんと目を合わせると、ただずっと黙っていた。その意味が伝わったのか、龍樹さんはため息をついて俯いた。

「…ごめんなさい。困らせるつもりはなかったんですけど。」

「いや、ひなたちゃんの気持ちは嬉しいよ。」

「あたし、別に彼女との関係壊そうとか考えてるわけじゃないです。ただ…気持ちだけ伝えたくて。だから、今日だけ思い出に恋人として龍樹さんと一緒にいれたらなあって。明日から全然普通にしてください！あたしも全然気にしないんで。」

「うーん…わかった。元から今日限定で彼氏役ってつもりだったかな。」

龍樹さんは優しく微笑んでそう言うと、唐揚げを一口に入れた。

そう、今日だけは思い出に…。

第8話：証

時計の針は12時5分を示している。今私は龍樹さんの部屋にいて……。何でこんなことになったかって言うと、少し話をさかのぼらなきゃいけない。

店から出たあと、私は帰りたくなって適当に『夜景が見たい！』なんて言ってみた。

龍樹さんは近くの夜景スポットに連れていってくれて……。いい雰囲気になっちゃったもんだから、つい私は『キスは無しなの？』なんて言ってしまった。

龍樹さんはびっくりしてたけど『1回だけな？』と言って一瞬だけ唇を合わせてくれた。

もちろん、そんなんじゃない私は『もっと』。

『ってお願いしちゃったんだけど』。

龍樹さんはしばらく抵抗してたけど、そのうち本当の恋人みたいに優しくキスしてくれた。

きっと私と同じように頭の中で『今日だけだから……』って繰り返してたんだろう……。で、帰る時間になったんだけど、私は家の前に着いたら泣き出しちゃって……。困った龍樹さんは自分の家に連れて来てくれた。家に帰ったら、こんな夢覚めちゃうんだって思ったら、悲しくて涙止まらなかったんだ。うざいって思われてなければいいけど。

「落ち着きましたか？」

コーヒーの入ったカップを2つ持って、龍樹さんは問い掛ける。私は恥ずかしくなって下を向いたまま何回も首を上下に振った。

「時間大丈夫なのか？ おかん怒らないか？」

「あっ、大丈夫です。」

私の座っていたソファに龍樹さんもゆっくりと座る。こんな風に

一緒にいれるのは嬉しいけど、その反面魔法が解けてしまう時間が怖い。

「もう、12時過ぎたから終わりだな。」

「だっ、駄目だよ！私が家に帰るまでは彼氏なの！」

私は焦って自己中な発言をしてしまった。

「ずいぶん都合いいんだなあ。」

龍樹さんは笑ってるし、どうやら飽きられてはないみたい。私はほっとしてコーヒーを口に運ぶ。でも、いつ帰るんだろう…明日はお互い仕事入ってるし、結局は帰らなくちゃいけないんだよね…。このままずっと自分に都合のいいように、時間は過ぎていかないもんね。明日からまた龍樹さんはあの人の彼氏なんだから…。

「ひなたちゃんさ、若いんだし俺なんかやめていい奴見つけなよ？」

「それができたらそうしてます。年とか関係ないでしょ。…好きになっちゃったんだもん。」

「何で俺なんだや。ただのおっさんですよ？」

「わかんないけど、龍樹さんがいい。…大丈夫、明日からちゃんと諦める努力するから。」

自分にも言い聞かすように私はつぶやく。龍樹さんはそっと手を伸ばして頭を撫でてくれた。

「…今日言ってたこと本気だよ。」

「…思い出にってやつ？」

「ダメ…ですか？」

龍樹さんは少し考えてから私を見た。

「それでひなたちゃんは辛くないの？」

私は一つ首を縦に振る。龍樹さんは私をお姫様抱っこしてベットに運んだ。

いけないことだってわかってた。今時の女子高生だからこんなことするわけじゃない。軽い気持ちでするわけじゃない。ただ、本当に純粋に龍樹さんに抱かれたいと思った。嘘でもいいから愛されてたって証が欲しかった。忘れないように体に刻み付けたかった。

私は龍樹さんの温かさを感じながら涙を流していた。

第9話：泥沼

どうしよう…。

朝目が覚めて、昨日のことを思い出した私はまず最初にそう思った。本当に普通の顔で会ってくれるかな…嫌われてないかな。

私は重い気持ちで布団から出る。

まず、会ったら何て言おう…。

話題、話題…。

歯磨をしながらテレビを見て必死に話題を捜す。

自分から言い出したこととはいえ、何もなかったかのように接するなんて、100%無理に近い。やっぱり仕事辞めるときに告白すべきだったかな…。でも、昨日は私のわがままに付き合ってもらったんだから、今更後悔なんて無しだよ。いつも通り、普通に話しかければ、きっと龍樹さんも笑ってくれるよ。

「ふう。」

私は息を整えて家を出た。沢山の不安を背負って…。

「おはよう、ひなたちゃん。」

スタンドに着いて即効、龍樹さんに挨拶された。私が悩んでたことはなんだったんだ…。

「あつ、おはようございます。」

ワテンポ遅れて挨拶をした私に、龍樹さんはいつものように笑いかけた。『いつも通り』それがすごく嬉しくて、すごく切なかった。ねえ、龍樹さんは昨日のこと何でもないことに出来るの？私は昨日のことちゃんと覚えてるよ。龍樹さんが言ってくれた言葉一つ一つ。なかったことになんかできない。全部鮮明に覚えてて私を苦しめるよ。

「あー、ぷよぷよとか昔はまりました。」

「俺は今まっつからね。」

龍樹さんが自慢げにみんなに言う。

「たっちゃん、ぷよぷよ強いっすよね。」

どうやら対戦したことがあるらしい涼太さんは笑いながら言った。

「あたしも久しぶりにやりたいなあ。」

「俺様には誰も敵わねえよ。」

威張って言う龍樹さんを冷めた目で私が見ると、龍樹さんは八重歯を見せて笑った。そんな仕草一つに私の胸は高鳴る。息苦しくなつて私はその場を離れ、使用済みのタオルを回収しに行った。そんな私の態度に気付いたのか、龍樹さんはさりげなく私の近くに来る。

「ぷよぷよやりたいのか？」

「うん、やりたいですねえ。」

どうにかこうにか笑顔を作つて私は龍樹さんに返事を返す。

「明日仕事終わつてからぷよぷよやりに来るか？」

「えっ？」

「嫌なら、別にいいけど。」

私は龍樹さんの言葉が何を意味しているのか、何となく気付いていたんだと思う。これから関係が始まっていくんだろうって感じながらも私は断ることが出来なかった。

「行く…。」

どんな関係でもいい。龍樹さんと一緒にいたい。正直、そう思った。

第10話：偽物

あの日から始まった浮気関係は、誰にもばれることなく続いている。もう、1ヶ月近く経つかない。

「やっぱり、夜は寒くなるなあ。」

「んですね。」2月も終わりに近づいているが、まだ夜は震えるほど寒かった。龍樹さんとはバイトの時は至って普通の会話しかしていない。2人の時はまるで恋人同士のような会話をしてるんだけど。「あっ。」龍樹さんはスタンドに入って来た車に近づいていた。あっ。：あれは香織さん。龍樹さんの彼女の車だ。降りて来た香織さんは手に差し入れの袋を持って行た。

「こんばんわ。」横を通り過ぎる香織さんに私は小さく挨拶をする。香織さんはあたしに頭を下げるだけだった。女の勘：なのかな。あたしが龍樹さんを好きなこと気付かれてるのかも。

香織さんが来たのを合図に、私たちは店の中に入った。冬の夜はお客さんが少ないので、店の中で待機することが多い。もちろん、自分達が楽できるからってのもあるけど。でも、今日だけは中に入りたくないな。

「今日カラオケ行こうよ。」香織さんの提案に龍樹さんと弟の涼太さんが賛成する。私は蚊帳の外。龍樹さんは私と目を合わせようとできなかった。私だって楽しそうに話してる2人の姿なんて見たくないけど。

香織さんが店にいる間、私は何回も外に出て閉店の準備をしていた。本当はそんなに頻繁に外に出る必要はなかったけど、2人の楽しそうな会話を聞きながら平然とお客さんを待つなんて私にはできなかったから。涙が出そうになるのを堪えるだけで精一杯。龍樹さんに笑顔で話せる自信はなかった。

目の当たりにして、やっと気付く。自分のしてることは間違いで：

私たちの関係は偽物で、愛なんかないんだってこと。ずっと目を反らしてきた。考えると辛いから気付かないふりをしてきた。こんな関係続けたって未来はないんだ。

離れなくちゃいけない。香織さんのためにも、自分のためにも。

第11話..選択

「何したの？元氣ねえこと。」私の頭を撫でながら龍樹さんは優しく問い掛けた。これで、彼女に隠れて会うのは何回目だろう…。

「…香織が昨日来たの辛かったか？」

「…うん。」私は首を横に振った。それも私が鬱になってる一つの理由だけど。

「俺、香織と別れるよ。」

「えっ…?!」突然の一言に私は一瞬息が止まった。別れるって…それって私が望んでた答えなのかな？人を傷つけて自分だけ幸せになっただけなのかな？

「あたし、そんなつもりじゃ…」

「俺と付き合いたくない？」

「そういうことじゃなくて…」私は言葉に詰まった。そんな質問されても困る。私は龍樹さんが好きだから、自分だけの龍樹さんになってほしいって思ってる。でも、彼女から奪うつもりで一緒にいたわけじゃない。いつも自分の中で矛盾した気持ちが渦巻いてた。答えなんか出せそうにない。

「ひなた…？」心配そうに私の顔を覗き込む龍樹さん。私は自分の中の感情を抑え切れずに泣き出していた。

「人の幸せ壊すなんて考えたことなかった…。あたしはそんなことできない人間だと思ってた。なのに…最低だね、あたし。」

「…ふう。俺、ひなたが好きだよ？」

「…？」さりげなく告白されて私はキョトンとする。

「好きじゃなかったら、こんなことしてないよ。だけど…ひなたは若いしいつ気持ちは変わるかわかんないでしょ。正直、それが怖いってのはある。まあ、気持ちがひなたにあるから香織とは別れるつもりだけど…」

「だ、だって…香織さんのこと好きじゃないの？別れていいの？」

「ひなたが好きだから、やっぱり香織には冷たくなってるんだ。香織も気付いてると思うし。まあ、香織のこと嫌いになったわけじゃないから、正直泣かれたりずっと辛いけど、もう付き合っていけないから…うん、別れるよ。」そう言うとき龍樹さんは私のことをギュッと抱きしめた。

「でも、やっぱり…あたし、自分だけ幸せになるなんてダメな気が…」

「俺がひなたを選んだんだ。ひなたが悪いわけじゃないよ。」香織さんの悲しむ顔が一瞬脳裏を過ぎった。でも、私は今日の前にいるこの人が愛しくてしょうがなかった。

「あいつを傷つけたのは俺だ。ひなたはなにも負い目を感じることはないよ。だから、あいつの分もひなたが幸せにして？」少し照れたように笑う龍樹さんが可愛くて、思わず私は苦しくなるほどぎゅく抱きしめてしまった。

神様ごめんなさい。他の人を傷つけてしまった分、龍樹さんを大切にするから。ずっとこの罪を背負っていくから。だから、龍樹さんの全部を私に下さい。

龍樹さんの胸で泣きじゃくりながら、私は心の中でそんなことを思っていた。

第12話..新生活

2月24日、私と龍樹さんは正式に付き合うことになった。

何となく私は龍樹さんに敬語を使わなくなったし、呼び方も『たちちゃん』に変わっていた。

どこにでもいる恋人達みたいにごく自然に。

でも、香織さんから奪ってしまったわけだから、私は舞い上がったりはできなかった。たちちゃんの彼女になれたことは素直に嬉しかったけど、その反面後ろめたい気持ちにも付き纏われた。でも、私はこの道を選んだんだ。どうしても龍樹さんが欲しくて欲しくてたまらなかったから。自分が最低な女だってわかって、周りからなんて言われても龍樹さんの傍にいたかった。

付き合い始めて1ヶ月とちよつと。些細な喧嘩はあるけれど、私たちは仲良くやっているとと思う。

そして4月、私は飲食店に就職した。

慣れないことばかりで毎日疲れが溜まる。

あぐくの果てに、勤務先は家から遠くなるし、免許も間に合わず電車で通う羽目に…。

休みは月に6回しかないし、通勤だけで時間がかかるから、自分の時間なんて全然持てなかった。なによりもたちちゃんと会う回数が減ってしまったのが、大きなストレスになった。不思議なことに、疲れているのにたちちゃんとは毎日会ってもいいと思えた。今までこんな風に思ったことは1度もないのに。寝る時間よりもたちちゃんと会ってる時間の方が体が休まるんだ。これっておかしいのかな？

そんな新しい生活が始まった矢先。残念なお知らせが1つ。

うちの親が離婚しました。

第13話..離婚

「そういえば、おかあ離婚したみたい。」私からの突然の一言に、たっちゃんも驚いて口が開いたままになっていた。こんなことをさらっと言われたら、誰だってびっくりするとは思うけど。

「ずっと喧嘩してたしね。怪しいとは思ってたんだ。しばらく帰ってこないと思ったら離婚してたんだって。」私は半分笑い混じりにそう言う。それは少しでも暗い空気を吹き飛ばしたかったから。

「したら、おかんバツ2じゃん。つか、それみんな知ってたのか？」

「さあー？」

「さあってお前：他人事じゃねえんだから。」

「でも、私の口からみんなに言うことじゃないよ。」私の一言にたっちゃんは何も言えなくなったらしく、黙って下を向いていた。

うちは6人兄弟で、上3人が1人目の旦那との子供。下3人が2番目旦那との子供なんだ。

下の子達はみんな血が繋がってるって思ってるかもしれないけど。

1番目の父親は訳ありでヤクザになってしまい、私たちを危険な目に遭わせないために自分から離れていったらしい。

幼い頃の出来事だから、かなり記憶が曖昧だけど、おかあが時折泣きそうな目で、おとうを見てた気がする。もしかしたら、愛し合ってたまま別れたんじゃないかな…。私はそんなおかあを知ってるから、新しい『お父さん』が出来ても反対はしなかった。おかあを支えてくれる人がいるのは嬉しかったから。まだ妹は赤ちゃんだったし、何も思わなかっただろうけど、1つ下の弟は私と同じ気持ちだったと思う。

で、今回の離婚は多分、おとうが仕事に失敗したのが始まり。

おとうは借金だらけになって、おかあにもいろんな嘘をついていた。それは娘の私でも気付いたから、おかあもちろん気付いていたと思う。そんな中で夫婦の信頼関係が崩れちゃったんじゃないかな。

まあ、あくまで私の推測だけど。離婚ばかりは夫婦の問題だし、おかあが出した答えなら私は反対したりしない。

「なんか実感沸かないなあ。今までだっておとうしばらく帰ってこないときあったし。明日になったら、普通の顔して家にいそー。」
これから一生、おとうの顔を見ないで生きていくなんて、想像できない…。

「…もう、この話はやめよっ！」

「…わかった。なんかあったら言えよ？」

「ういー。」私はいつも通りの笑顔をたちちゃんに見せる。そんな私にたちちゃんは小さくキスをした。たちちゃんといると幸せ。今はそれだけでいい。私はそんなに強い人間じゃないけど、たちちゃんがいれば大丈夫だって、根拠も無いのにそう思ってた。

だけど、私は自分が思ってたよりずっと弱い人間だったんだって…
そう、思い知らされたんだ。

第14話..異変

最初に異変を感じたのは、親の離婚を知ってから1週間が経った日の夜。

いつも通りに寝ようと思ったら、突然ザーって耳鳴りがして…急に一人ぼっちになったように寂しくなった。

隣を見れば妹がいびきを掻いて寝てるし、襖一枚隣の部屋では弟達が眠ってる。なのに何故か目をつむると急に静かになって、誰もいない世界にいるみたいになった。その日眠りに就くまで何時間かかったんだろう…目覚めた時はカーテンから眩しい太陽の光が覗いていた。…昨日の"あれ"はなんだったんだろう。疑問を持ちながらも、私はいつも通り家を出た。

「そろそろ帰るか。」

「ええー、もう帰るの?」

「だって明日早番なんだ…」むんつけてる私にたっちゃんは申し訳なさそうに言う。時計に目をやるともう夜中の2時を回っていた。帰りたくないな…。

コテっとたっちゃんの胸におでこをくつつける。たっちゃんは優しく私を包んだ。幸せだな…。そう、思った瞬間だった。また、昨日の耳鳴りが始まったんだ。たっちゃんがここにいるのに、急に寂しくなって…私は泣き出してしまった。もちろんたっちゃんはびっくりしていた。こんなタイミングで泣くなんて誰も考えないもんね。

「な、何で泣いてんの?!」たっちゃんの声はなんとなく聞こえる。だけど、だんだん胸が苦しくなってきた…私は泣き続けることしかできなかった。たっちゃんは何も言わないで抱きしめてくれた。怖い、怖い、怖い…。

「助けて…たっちゃん…」かすれた声で、私はそんなわけのわからないことを言っていた。今の自分の症状をどう伝えたらいいのか、ど

うやったら伝わるのか全然わからなかった。自分自身よくわからない状況だったから、尚更たっちゃんに伝えることなんてできなかった。

でも、もし例えるとしたら、まるで深い海の中に沈んでいくような感じ。暗くて静かで苦しくて：早くここから助けてって叫んでるの。「大丈夫だから。」そう何回も何回も、たっちゃんは呪文みたいに繰り返す。

「行かないで。一人にしないで：。」そう言って泣きじゃくる私の傍に、たっちゃんはいつまでもいてくれた。

どうやって帰ったのか、いつ帰ったのかは、あまりよく思い出せない。けど、目覚めたときには布団で寝ていたし、目覚ましもかかっていた。たっちゃんが家まで入れるわけがないから、きっと自分の意志で帰って来て寝たんだろう。

ねえ、たっちゃん。私なんか変だよ：？

第15話：何万回言っても足りない

「ひなちゃん？具合悪いの？」

「えっ、ああ：ちよつと頭痛くて…。」職場の先輩に突然声をかけられて、私はとっさに嘘をついた。仕事をしてるときは症状はそんなに酷くないけど、時々不安に襲われて息苦しくなったりはした。でも、仕事中に泣き出すことは無いし、たいした支障はでなくてよかったと思う。

ただ、たっちゃんと会ってるときは幸せだって感じると、泣きたくなかった。

一人で眠るのが怖くて何度も電話をかけたりした。たっちゃんはそんな私に愛想尽かさないで、ずっと傍にいてくれる。私は大きな愛に包まれてるんだって凄く今実感してるんだ。

今日の夜もたっちゃんに会える。でも、今日はたっちゃんに、大事な話しをするつもりでいるんだ…。

「お疲れ様。」ようやく仕事を終えて、たっちゃんに会えたのが嬉しくて、私は満面の笑みで車に乗り込む。

「お疲れ。」そう言ってたっちゃんは私の頭をくしゃくしゃとした。

「たっちゃん。」

「ん？」

「あたしといて嫌じゃない？疲れない？」私は最近気になっていたことを、思い切って口にした。たっちゃんは突然の質問に少し驚いてるみたい。でも、ちよつと考えると、たっちゃんはゆつくりと口を開いた。

「そりゃ、笑って一緒にいてくれたほうが嬉しいけど…。」

「…だよな。」当たり前前の返事だったけれど、やっぱりショックで私は泣きそうになってしまう。

「でも、ひなたんは俺がいなくなったら死ぬからなあ。一緒にいてやんないとなっ。」たっちゃんは冗談っぽく言って、俯いてる私のほっぺをつまんだ。

「…いいの？別れたくないの？」

「ひなたは別れたいの？」私は黙って首を横に振る。

「だったらそんなこと言わねえの。俺はひなたと一緒にいたいよ？」

「だって…今のあたし泣いてばかりだもん。疲れるじゃん。」

「俺はそれでもひなたといたい。もう、ぐだぐだ言うなわ。俺がいいって言ってんだから、これでいいの。」たっちゃんは少し乱暴に、私の涙をティッシュで拭いてくれた。でも、涙は次々溢れてきて…幸せだって思ったから。たっちゃんに会えてよかったって、本当にそう思う。

好きって何万回言っても足りないくらい、私たっちゃんのが好きだって思うよ。早く昔の私に戻るからね…。

第16話：手紙

それから2ヶ月位、私の病氣みたいなものは続いた。何度も過呼吸になって泣きたくないのに、突然泣く自分が嫌で『死にたい』と口走ることもあった。だから、たっちゃんも相当参ってたと思う。そんなたっちゃんを見るのが私は何より辛かったんだけど。

そして、私達が付き合い始めてから、4ヶ月が経った。今日、私はくだらないプレゼントを用意している。

「たっちゃん。これ欲しい？」私は鞆の中から四角に折られた紙を差し出す。

「何これ、手紙?!」

「調子こいて書いてみた。」私はイシシと笑った。

「あっ!ちょっと!家に帰ってから読んでね。」すぐに手紙を読もうとするたっちゃんの手を、私は慌てて押さえる。

「はいはい。」たっちゃんは笑って手紙をポケットにしまった。

「手紙とかって、うざいよね?」と、恐る恐る聞くと

「嬉しいよ。」ってたっちゃんにあっさり返されて、逆に私の方が恥ずかしくなってしまう。

私が突然手紙を書いたのは、これから先いつか2人でこれを見て「こんなこともあったね。」って笑い合いたかったから:その時また、たっちゃんの大切さに気付きたかったから。だから、恥ずかしくても思ってる気持ち全部書いたんだ。

「たっちゃん。ありがと。」

「ん?なんだ突然。」たっちゃんは少し照れて、私から目をそらした。

「悲しくないわけないんだよね。」私は静かに話し始める。たっちゃんも黙って聞いてくれた。

「いつも一緒にいた人が、何にも言わずに姿を消すんだもん。しかも、2回もだよ？：なんか怖いよね。愛してる人はいつか知らない間に、離れていくんじゃないかなあって…。」私は蟻が喋ってる位小さな声で話してたけど、たっちゃんは一生懸命耳を傾けてくれた。

「幸せだなあって思うと、たっちゃんがいつかなくなっちゃう気がして…。」

「いるよ、ずっと。」

「そう言うとは思ってたけど。」私は少し笑って、たっちゃんの肩にもたれる。たっちゃんは私の手を握った。凄く、強く。

「幸せな家族だと思ってたから余計、無くなったのが辛かったのかも。トラウマみたいなの？：でも、たっちゃんはずうとあたしの傍にいてくれたでしょ。なんか：ようやく永遠ってやつを信じられそうです。」照れてる私を見て、たっちゃんは馬鹿にしたけど、本当はたっちゃんだって照れてたんじゃないかな…。

「しかも、しかも、思ったんだけど、あたし長女だし、おとうも違う人になっちゃったりしてさあ、甘えたことってなかったじゃん？だからさあ、ちっちゃい頃それができなかったから、自然に今それができる相手を求めてたのかも。なんか、たっちゃんは、ちよっとお父さんっぽい。」

「なに？俺はまだまだ少年の心を持ってるんだぞ！」

「…ぷっ。」そんなたっちゃんの意味不明な台詞に、私はお腹を抱えて笑った。馬鹿笑いしてる私を見て、たっちゃんも笑った。

ある意味バカプルだなあって思う。でも、凄く幸せ。

「あっ、でね。お願いがあるんだけど…その服ちょうだい！？」

「は？これ？」たっちゃんはいつも来てる白いセーターを指差す。

「それ。だってたっちゃんの匂いがして、安心するんだもん。」私は必死に訴える。結果…。

「気に入ってたのに。俺の新しいやつ買えよ。」

「…うん！」

どうやら私の勝利。私はたちちゃんから貰ったセーターを、ギュー
って抱きしめた。
なんか、私の病氣治りそうです。

第17話：平凡

たっちゃん付き合ひ始めて1年。

すっかり私の病氣は治みたいなつていた。そういうのを乗り越えたから、お互い言いたいことを言える関係になったと思う。

ここ1年で気付いたことは、たっちゃんは意外とうるさいってこと。例えば、言葉遣いとか：女の子らしくないと怒るし。レストランなんかで注文する時は、自分の分は自分で言えって叱られるし。私の話に男の人の名前がチラツと出るだけで、すぐに妬くし。

怒らせちゃう私も悪いんだけど、たっちゃんはすぐに怒るんだ。別にそんなことで別れようとは思わないけど。

それからたっちゃんは、時間を裂いて私に会おうとしてくれなくなつた。

週に3回は必ず会ってるし、無理させたいわけじゃないけど：たまにはサプライズ的に、会いに来てくれたっていいと思うんだ。私は寝る時間を削ってでもたっちゃんに会いに行くのにな。

ちよつと愛がたりないんじゃない？って最近思う。たぶん、そんなに無理しなくても、お互いが離れることは無いって安心してゐるから、こうなるんだろうけど。

1年付き合ったら、こんな感じに安心するのかな。私はそんな長く付き合つたことないから、全然わかんない。

たっちゃんはバツイチだし、いろんな経験してるとは思うけど：。

私はまだ19だし、経験値が違うよ。

そして、最近私が心配なのは、たっちゃんに対する私の気持ち。

私はこの1年でたっちゃんの嫌な部分沢山見てきた。くだらない喧嘩も山ほどした。でも、別れようって思ったことは1回も無い。

けど：別れようって言われたら、私は素直に受け入れられる気がする。ここが問題。

たっちゃんのことは好きだけど、決して"恋"って感じじゃなくて

…家族に対する気持ちに近いと思うんだ。たっちゃんと一緒にいると楽しいし、刺激は無いけど安心するし…。
でも、こんなんでいいのかな？これって恋愛なのかな？
私はそんな小さな疑問を抱いていた。

そんな時だった。私は、人生最大の過ちを侵した。

第18話：不安

「ひいも眼鏡フェチなの？」

「うん。あとSな人。」私がそう言うと、バイトの真奈ちゃんは私の肩を叩いて笑った。

「えっ、ダメ？」

「何の話してんだよ。」私たちが笑っていると、後ろから副店長がにやにやしながら近づいて来た。一応仕事中だけど、結構みんな適当で、裏で話をすることも少なくない。もちろん、仕事をしながらだけ。

「副店ってこうゆう話してると、すぐに混ざってくるよね。」真奈ちゃんの台詞に私も頷く。

「やっぱこういう会話には、混ざっておかなきゃね。」

「なんか弱み握られそうで話たくないんですけど。」私と真奈ちゃんは副店から逃げるように、ホールに戻った。別に本気で副店が嫌で、逃げたわけじゃないけど。

副店は厳しいときは厳しいけど、若いし面白いから嫌ってる人はいないんじゃないかな：たぶん。むしろ私なんか、タイプなんです。

「真奈ちゃんさあ、彼氏と別れようと思うときある？」

「ええー、何で？ 別れようとかは考えないけど、真奈結構冷めてるよ。」

「そうなの？」真奈ちゃんも確か彼氏と1年くらい付き合ってるはず：やっぱり、付き合い始めの頃よりは冷めてくるもんかな。

「ひい彼氏と別れんの？」

「そういうわけじゃないけど：なんかあたしも冷めてきてんのかなあ。」私は大きいため息をついた。たっちゃんは彼氏として最高だと思う。そりゃ、嫌な部分もあるけど、なんだかんだ優しいし、リードしてくれるし、面白いし。：でも、それでもなんか足りない気がするの何でかなあ。

「こういうときってさあ、周りにいる男の人がかっこよく見えるよね。」そんな真奈ちゃんの言葉に私はドキッとする。そう、かっこよく見えてしまうんです。

「ああ、確かにね。」

「ひいは副店タイプでしょ？」

「えっ！？ああ、かっこいいとは思うけど、どうかなあ。」さりげなく交わしたつもりが、真奈ちゃんにやっと笑われてしまった。

「てか、真奈ちゃん、送別会来てくれんの？」慌てて私は話を反らす。

「あつ、それさあ、あたし学生だから行けないみたいだよ。」

「そうなの？！」

「バイトは警察に捕まらないように、日中やれてさ。」真奈ちゃんは少し怒ったように言った。

実は私は2月いっぱいでの店を辞めることになった。理由はまあ、いろいろあったけど、本社のやり方に腹が立ったのが1番かな。まあ、それでみんなで送別会をやってくれるらしいんだけど、私は少し心配。

だって…お酒飲むんだもん。

第19話：送別会

時間は11時過ぎ。店の近くのカラオケで私の送別会が行われた。バイトの女の子達は出れなくて、女はパートさんだけしかない。でも、うちのパートさんは若いし、いつも下ネタを話したり、相談にのってくれたりして私は好き。

「ひい、酒飲んでる？」若干ハイになってる店長に突っ込まれて、私は慌てて酒を飲み干した。私は酔いやすいから、2杯までしか飲んじゃ駄目って、たっちゃんに言われてるんだけど。でも、散々心配だって言ってたくせに、メールの返事もくれやしない。おまけに、急に自分も遊びに行くとか言い始めるし…。私は小さくため息をつく。

「お前、もう携帯見んの禁止な。」

「えっ、あ、はい。」副店にそう言われて、私は情けなく返事をした。

確かに私の送別会なのに、携帯ばかり見てるのは失礼だよね。私はテーブルの上に出していた携帯を、鞆の中にしまった。

「ひいが主役なんだから、もっとテンション上げないと駄目だー。飲め飲め。」周りのみんなに責められて、私はついに3本目のお酒に手をかけてしまった。

「やっぱそうこなくちゃな。」

…みんな笑ってるから、とりあえずいっか。

「ひい、歌います！」私はマイクを手に取り、頭をブンブン揺らしながら熱唱した。みんなが笑ってくれるのが嬉しくて、つい調子こいてしまう。

「お前大丈夫か？」歌い終わった後、お疲れ気味の私に副店は優しく声をかける。いつも冷たいのに、今日は優しいんだな…。私は大丈夫と言ったものの、実際かなりグロッキーだった。だいぶ酔いが回ってきてる。

「トイレ行くか？」平気なふりをしてるのに、副店には見透かされてるみたい。みんなは騒いでるけど、副店だけは私を気遣ってくれていた。

正直すごく嬉しかった。やばいよ…。

そんな時、部屋の電話が鳴って、みんな一斉に時計を見る。私も時計を見ようとして、振り返る。その瞬間ぐらっときた。

「わっ。」そして、その頭はそのまま副店の膝の上に持って行かれた。

「お前はもう大人しくしてろ。」副店はそう言って私の頭を撫でてくれる。何故か懐かしい感じがした。

そういえば最近、たちちゃんにしてもらってないな…。

「あと、このまま行っていいいわ。俺、部屋の近くまで連れていくから。」私の家の近くまで来た所で、副店は運転してた坂神さんにそう言った。飲酒運転にならないように、みんな酒を飲まない坂神さんに送ってもらっていた。私は大丈夫と言いたところだったけど、とても一人で歩けるような状態ではなかった。諦めて私は副店に肩を貸してもらって、帰ることに。

「すみません。」

「いーよ。」いつにもなく優しい副店に、私はドキドキされっぱなし。エレベーターの前で立ってるとき、

私ははっと携帯を取り出した。画面を開いてびっくり。メールは一通も届いてなかった。もしかして寝ちゃったのかな…。

「そんな寂しい顔すんな。だから、見るなって言ったのに。」

「…。」今まではこんなことなかったのに…でも、まだ2時半だし、きつとたちちゃんも盛り上がってるんだ。無理矢理そう思ってもないんだか悲しかった。ほっとかれてる気がして。

「寂しいの？」

「…うん。」

「…一緒にいてあげようか。」嬉しくて涙が出そうだった。でも、断らなきやって頭ではそう思った。なのに私は、揺らぐ気持ちを押しさえられずにいた。

私は縦に首を振った。

第20話…後悔

『酔っていた』そう言ってしまえばそうかもしれない。でも私は、確かな意識の中で副店に抱かれた…。

夜中の3時頃、たちちゃんからメールが来ていた。でも、私はそれを気付かないふりをして、副店の腕に抱かれて眠った。今日だけでいいから、この人の優しさに甘えたい…そう、思った。

副店は朝6時に私の家まで送ってくれた。車から出る私に、副店は優しく笑った。けれど、その顔は『ごめんな』って言ってるように見えた。家に帰ってすぐ、私は布団に寝転ぶ。枕元にはたちちゃんから貰った、白いセーターが置いてあった。私は恐る恐るセーターを触った。もう、私には触っちゃいけない神聖なものに思えて…。どうしてあの人と寝てしまったのか、どうしてたちちゃんを裏切ることが出来たのか…考えても答えを出すことができなかった。『魔がさした』そんな言葉では片付けられない気がする。

あの人の傍にいと、昔を思い出す。何気ない言葉や行動1つ1つにドキドキしてた、あの頃。私があの人に抱いた気持ちは、恋愛に近かった…いや、もしかしたら恋愛だったのかもしれない。でも、私はたちちゃんと別れるつもりであの人と寝たわけじゃない。…じゃあ、何で？自分自身に問い掛けても、全然返事は聞こえなくて…ただ後悔の波だけがひたすら私を襲った。

私は鞆の中から携帯を取り出す。『未読メール有り』光るディスプレイにはそう表示されていた。ゆっくりとメールを開く。メール1通目。『まだ終わんないのか？俺はそろそろ寝るよ』

そして気付かなかったけど、もう1通。『何で返事よこさないんだ？先に寝てるからな』

4時13分のメールだった。私の目からは大粒の涙が溢れる。たちちゃんが心配してくれてたのが、不器用なメールから伝わって来たから。きつとずっと起きて待ってたんだろう。心配されてないなん

て、私の勝手な思い込み。たっちゃんの確かな思いに、私は胸が苦しくなった。

私はセーターをきつく抱きしめながら、何度も何度も謝る。ごめんなさい、たっちゃん…ごめんなさい…。

たっちゃんに貰ったセーターからは、もうたっちゃんの匂いはしなかった。

第21話..嘘

世の中の浮気してる人達はどんな顔で、恋人に会ってるんだろう。どんな声でどんな目で：私はもう綺麗じゃないのに。

携帯を見つめながら、ずっといろんなことを考えていた。難しい問題はいっぱいある。でも、今答えを出さなきゃいけないのは『嘘をつく』か『正直に言う』か。

それはつまり『別れる』か『別れない』に繋がってる。

たっちゃんと離れても平気にいる自信はない。でも、裏切っておいて何食わぬ顔でたっちゃんのそばにいるの？ たっちゃんはきつと今まで通り、真っすぐ私を見るだろう。私はそれに堪えられる…？

そんなときだった。手に持っていた携帯が震え、ディスプレイにたっちゃんの名前が浮かんだ。

親指がうまくボタンを押せなくて、何回も呼び出し音が鳴る。

まだ答えが出てないのに：こんな状況で電話に出ていいの？ まるで痙攣を起こしたみたいに震えが止まらない。

そんなことをしてる間にコール音は途切れた。自然にほっと息を着く。

次に携帯が鳴ったら、ちゃんと話そう。そう決めた途端、また携帯が震えた。

私は恐る恐るボタンを押す。

「：はい。」

「お前何やってんの？」 たっちゃんの呆れた声が耳元で聞こえた。

「なんでメールよこさなかったの？」

「あ、ごめんなさい。凄い酔ってたから：知らない間に寝ちゃってて。」 咄嗟に私はそう言ってしまった。

たっちゃんは何の疑いもせずに私の言葉を信じた。ただ、私が連絡しなくて心配をかけたことは反省しろ、と言って…。

一度ついた嘘を取り消すのは、始めから正直に話すよりもっと勇氣がいる。今の私にはそんな勇氣なかった。

正直に話したら、たっちゃんに何て言われるだろう。どんな言葉で別れを告げるんだろう。どんな目で私を見るんだろう。それを想像しただけで怖くて怖くて仕方がなくなった。

いつも怒られていても、たっちゃんの温もりをどこか感じていた。でも、きっと今回はそんな温もりなんて存在しない。私を酷く冷めた目で見るんだろう。

いつも温かかったたっちゃんにそんな目で見られて：私は堪えられるわけがない。

結局どこまでも私はたっちゃんに甘えてるんだ。裏切ったくせに、それでもまだたっちゃんの優しさに縋り付いていたいと思う。そんな自分が憎くてしょうがない。

私はたっちゃんを都合のいいように、利用してるだけなのかな。

そこに愛はもう存在しないのかな…。

なんで自分の気持ちなのに自分でわからないんだろ。

私は逃げ出せない場所まで来ていた。

第22話…紙切れ

夕方、店長からメールが届き、離職の手続きをするため私は辞めた店に向かった。つまりそこには副店もいるわけで：私はどんな顔で会ったらいいか、ドキドキしながらドアを開けた。

始めに目が合ったのは副店だった。

「お、お疲れ様です。」明らかに挙動不信心私に対し、副店は顔色一つ変えずに返事を返す。：なんとも思っていない証拠、だろうか。

「おお、来たか。この書類なんだ。ちょちよいと適当に書きいちゃって。」副店の隣にいた店長が書類片手にそう言った。

「はい。」私はその場でちょちよいと適当に書く。そんな姿を副店が横から見ていた気がした。

書き終わった私はみんなとくだらない話を10分ほどして、帰るところにした。話をしてる間副店の顔を1度も見る事が出来なくて：どんな顔で副店が私の話を聞いているかまったくわからなかった。

「じゃあ、また来ますね。お疲れ様です。」私はそう言うみんなに手を振り、ドアを閉めた。結局私は最後まで副店の顔を見れないまま。こんなんじや『気にしてます』って言ってるようなもんだ。

自分に呆れてため息を着くと、後ろから誰かが私を呼び止めた。

びっくりして振り返るとそこには副店が立っていた。

「お前、これ忘れてるぞ。」

「えっ!？」私は慌てて副店に駆け寄る。手渡されたのはただの紙切れだった。困惑した様子で副店の顔を見上げると

「挙動不信心すぎるだろ。」と副店は私を馬鹿にした。

「気をつけて帰れよ。」

「はい。」副店は私の返事を聞くと店へと戻って行った。

一体何のために出てきたんだろう…。私に注意するため?疑問を抱えながら自転車に乗ろうとした時、さっき渡された紙切れが手から擦り抜けた。その時、はっと気付いて紙を拾い上げ、ごちゃごちゃ

に丸まった紙を開いた。中には見慣れないアドレスが書いてあった。
間違いなく、副店のもの。

「なんで…。」

私はその紙切れを捨てることができなかった。
気持ちが動いてしまっている気がした。

第23話：揺らぐ気持ち

「ん、じゃあね。」電話を切った私は深くため息をついた。何事もなかったかのようにたっちゃんと話す。そんな自分が卑怯で汚らしく思えた。

捨てられずにいる副店からもらった『紙切れ』。

正直嬉しかった。

さつき副店に会うまでは気持ちは落ち着いていて：一生嘘をつき続けてたっちゃんの傍にしよう、そう考えていた。彼氏としてたっちゃんは私に最高の愛を与えてくれる。温かくて居心地のいい場所を与えてくれる。たっちゃんが駄目なところなんて見つからない。だから、たっちゃんを選んで間違えはないと、そう思った。

だから尚更、たっちゃんを選ぶなら、これ以上嘘が増えてはいけない。

散々そう思ったのに：。悪戯っぽく笑って私を馬鹿にする副店の顔が、さつきからずっとちらついてて：私は副店にメールを送ってしまった。

たっちゃんを裏切ってる。心はそう痛むのに、副店というときのあのドキドキが忘れられなくて：。『会いたい。』そう思ってしまっている自分がいた。

たっちゃんに駄目な理由はないのに、だんだん副店に惹かれている自分がいることはわかっていた。私は昔自分に問い掛けたことがあった。

『刺激』と『安心』選ぶならどっちか。答えは安心だった。でも、今なら解る。『刺激』の中にいるときは『安心』が欲しくなるし、『安心』の中にいるときは『刺激』が欲しくなる。結局私はわがままってこと。

何かで満たされてれば何かが欠けてると思う。なんて最低な女なんだろう：愛される価値のない人間だ。副店からの返事を待ってる私

に、たっちゃんのを愛を受け取る資格はない。副店に惹かれている自分を認めるなら、たっちゃんとは別れるべきだ。それが出来ないなら、副店とは縁を切る。

…どっちもできないなら？私は誰かに問い掛けた。
どっちも失うよ。

そう、言われた気がした。

第24話..決意

副店とメールをしてると意外な面が見えて、何だかくすぐったかった。今まで一緒に仕事をしてたのに、全然知らなかったんだなあ、と思う。まるで私は恋する少女に戻ったみたいだ。

そんなんだから、私はどんどん気持ちちが副店に流されていって…もう、たっちゃんに嘘は付けないだろうと確信した。

『今日は俺が寂しいから、一緒にいて』と副店からメールがきたとき、私は断ることが出来なかった。

そして10時過ぎ。家の前にマフラーの音を響かせて1台の車が停まった。

「お疲れ様です。」ドアを開けて私がそう言うと、副店は少しだけ笑った。

適当に車で辺りをぐるぐるして、くだらない話をした。副店の知らない部分を知っていくたび、私の気持ちちも加速して行った。正直、副店が何を考えてるかにはわからない。遊びのつもりなのか、それとも…。

「彼氏にばれてないの？」

「…時間の問題、かな。」

「別れるの？」副店に問われて私は言葉に詰まった。たぶん、そんな結果になるだろう。考えていたはずなのに、そんなことわかっていたはずなのに、凄く怖くなった。

「俺、お前結構つばなんだよね。」どこかの駐車場に車を停めて、副店は静かに話始めた。「つぼって…どこが？あかし、本当に平凡な人間なんですけど。」

「お前はわかんなくていいけど、かわいいんだよね。」何でこの人はこんなにするすら恥ずかしい台詞を言えるんだろう。照るてる私が馬鹿みたいだ。

「それはあたしの嫌な部分見てないからです。あかし、わがままだ

し、喜怒哀楽激しいし…。」

「そんなくらい見てればわかるよ。でも、全然嫌にならないんだけど。」
俯いてる私の顔を副店は下から覗いた。思わず私は目を反らす。
怖かった。このまま流されてしまいうで…。

「本当はもつともつとわがままなんです！」

「そんなのどうでもいいけど。」私の必死の反論もあっさりと副店は打ち消した。

「お前、俺のこと気になってるでしょ？」悪戯っぽく、でも真剣な表情で副店は私に問い掛けた。

「あ、あたし、彼氏いるから…。」質問の答えにはなっていないが、私はそうとだけ言い返した。直接あの質問に触れなかったこの意味を、鋭い副店なら気付いただろう。

副店を気になってる気持ちがあっても、私はまだたっちゃんの『彼女』なわけで…たっちゃん以外の人が好きだとか、そんなこと言える立場じゃないんだ。

でも、本当は迷ってる。副店を気になってる気持ちはあるけど、たっちゃんを好きだって気持ちが失くなってしまったわけではない。たっちゃんとはもう別れてしまうだろうけど、だからといって副店と付き合うなんて考えはできなかった。

私は大きな信頼がない人と付き合っていけない。

今自分の気持ちに1番正直になるなら、私は…どちらからとも離れなかった。裏切ってしまった後ろめたさがあるから、たっちゃんとはもうやっていけない。

たっちゃんを傷つけることになるのに、自分だけ新たな恋に進めない。それに、副店とうまくやっていく自信もない。

私は一時の感情に流されて自分の気持ちを見失ってるだけだ。冷静に考えればわかる。

ドキドキしたのは久しぶりだった。新しいことを知っていく楽しさ、嬉しさ。全て時間が経てば薄れていってしまう。残るのは『安心』だ。

今は副店に恋をしている気持ちになっても、その気持ちが一生続くとは限らない。

副店は私を家まで送って笑って帰って行った。きっと最後だと悟って。

その日私はたっちゃんに最後の嘘をついた。

「明日会いたいな。」と。

第25話..さよなら

約束通り、次の日の夜、私はたっちゃんと会うことになった。とりあえずいつも通りに食事を済ませ、私は話を切り出すタイミングを伺っていた。

「今日はあんまり食わなかったな。調子悪いのか？」

「んー。」私は曖昧に返事をする。

たっちゃんに会ってちゃんと事実を話すつもりだったのに、あまりにもたっちゃんがいつも通りだから言えなくて…。今からたっちゃんを傷つけるんだ。そう思うと胃がキリキリしてご飯が食べれなかった。

「どうする？そろそろ帰るか？」

「ううん。…話したい。」

「じゃあ、いつもの駐車場行く？」優しく問い掛けるたっちゃんに胸が苦しくなり、私は一瞬声が出せなくなった。

「ん？」たっちゃんの目線を感じて、慌てて私は首を縦に振る。たっちゃんは駐車場へと車を進めた。

駐車場に行くまでたったの5分しかないのに、その時間がとてつもなく長く感じて…逃げてしまいたかった。今たっちゃんに嫌われる、恨まれるその現実から逃げたかった。

私は涙が出そうになったけど必死に堪えた。私が泣く立場じゃないから。切羽詰まった私の様子に、さすがにたっちゃんも気付き始めてるみたいだ。言わなきゃ。早く。

「…。」声にしたら涙が出てしまいそうで、私は痛いくらいに下唇を噛んだ。今言わなきゃもう言えなくなる。わかってるのに、声に出すのが怖くて…たっちゃんに伝えるのが怖くて…たっちゃんを失うのが怖い。

「何したの？」

「…。」

「ひなた。」私の名を呼ぶたっちゃんの声が『早く言って』と言えるように聞こえた。

「…浮気した。」

「はぁ？」

「ごめんなさ、い…。」言葉の途中で涙が溢れた。泣いたら余計嫌われる。わかってるのに、涙が止まらない。何、私被害者ぶってんの…泣きたいのは私じゃないのに。

「お前が泣くのは意味わかんなくね？つか、誰と？」その質問に私は首を横に振る。

「いいから言え！お前は俺の質問にだけ答えろ。」たっちゃんの怒鳴り声が車の中に響いて、私はびくっと肩を揺らした。

「…副店。でも、あたしが悪いの！」

「何お前あいつのことかばってんの？好きなのか？」

「ちがつ…。」

「お前からいったってことか。…まったく、やってくれたもんだ。」呆れてため息を着いたたっちゃんは、取り出した煙草に火を付けた。私には謝ることしかできなくて…そしてひたすら泣いていた。

呆れられた、嫌われた…本当にたっちゃんを失うんだ。そう思ったら胸が締め付けられるように苦しくって、息ができなかった。目の前が真っ暗で怖くてまた泣いた。

たっちゃんは煙草を吸ってる間ずっと外を見ていた。もう、憎たらしくて私の顔なんか見たくないんだろう。あれだけ永遠を誓っておいて、つい最近まで好きだって言っておいて、私は裏切ったんだから…。

失ったら死んでしまうってあれだけ思ってたのに、何でこんなことをしてしまったんだろう。自分が子供で情けなくなる。

煙草を吸っている合間にため息をつくたっちゃんを、私は怖くて見ることが出来なかった。

苦しいから、早く私を捨ててほしかった。この状況が辛いから、早く一人になりたかった。こんなに近くにいるのに、もう触れないな

んて…。

たっちゃんは無言のままアクセルに足をかけた。ああ、本当にこれでたっちゃんに会うことはなくなるんだ…。嫌だよ…。自分が憎いよ。消えてなくなってしまうばいのに。

家に近づくにつれて悲しさが大きくなって、どんどん涙が溢れた。思い出が涙と一緒に流れていくようで…。

どうしてこうやって思い出すとき、人は綺麗な出来事しか思い出せないのかな。嫌なところや喧嘩した日のことは、なかなか思い出せないよ…。

家の駐車場につき、私は鞆に手をかけた。ドアを開けようと左手を伸ばすけど、力が入らなくて開けられなかった。

やだ、やだよ。本当にこれで終わりなの…？ たっちゃんを失うの？ なんて自分は勝手に馬鹿な人間なんだ。今更私にはもう何も言えないんだから。

「どっちとんの？」 静かにたっちゃんは言った。

「えっ…。」 たっちゃんをとる。そう言いたかった。でも、私にそんな権利は無い気がして…もう私の思いは綺麗じゃない気がして…そんなこと言えない。

「どっちも、とらない…。」

「何で。」

「だって…あたし、もう、たっちゃんの彼女にふさわしくないよ。汚い、んだもん。こんなことしたのに、たっちゃんに好きだなんて言えないよ。」

「ふさわしいとか、そんなことお前が決める立場じゃねえだろ。どっちとんだよ。俺は…お前と別れたくねえよ。」 すごく辛そうに、押し潰される様にたっちゃんは言った。私は一瞬涙が止まった。いの…？ 許してくれるの…？

「別れたくないっ…」それが私の精一杯の力で言えた言葉。嬉しくて、嬉しくて、涙が溢れた。

それは今日、1番温かい涙だった。

第26話：萎れちゃうよ…

あの日から2週間ほど経った今、私は『浮気を許される』ことがどれだけ辛いのかを知った。

あの日、浮気を打ち明けたのはたっちゃんから離れるつもりだったわけで：許されたときのことなんて全く考えてなかったのだ。

人の気持ちはそんなに簡単には割り切れない。いくら許すと言っても、すぐに昔のような2人になれるわけではないのだ。

たっちゃんは：私に触ってくれなくなった。私から触ることに対して拒否はしないけど、自分から触ってくることはなかった。私はその現実を目の当たりにする度、自分は汚れているんだと思う。傍にいれることは嬉しいけど、それよりもっと触ってくれないことが悲しかった。

私はたっちゃんの気持ちを伺ってばかりで、自分の気持ちを何も言えなくなった。いくら好きだと伝えても信じてもらえない気がしたから。どんなに強く思っても、一度浮気した人間の想いなんて軽いものだと思われてそうで…。

毎日そんなことを考えると悲しくて涙が止まらなかった。眠りたくても嫌な考えばかり浮かんで、全然眠りに就けなかった。だいたい睡眠不足だと思う。ご飯も胃が痛くて食べられないし、ここ2週間で相当痩せただろう。：私よりもたっちゃんのほうがよっぽど辛そうだったけど。

そんなことを考えながらお風呂に浸かっていると、たっちゃんからメールが来た。

私は慌てて風呂からあがり、脱衣所でメールを返すと体が冷えないうちにまた風呂に戻った。今までは決してこんなことはしなかった。携帯は布団の上に置いて、お風呂にはゆっくりと浸かっていた。でも今は、すぐにメールを返さないとそれが喧嘩の原因になる。友達と遊びに行くのも変に疑われて、クラス会にも行けなかった。

まるで1日中監視されているみたいで、正直辛かった。こんなのがこれから先毎日続いたら：昔の私たちには戻れない。私も、そしてたっちゃんも笑顔なんか消えて、疑う気持ちばかりで毎日苦しむんだろう。

本当にこれでよかったのかな……。これが幸せになるための道だったのだろうか。一緒にいても苦しめ合うだけなら、離れるべきだ。たっちゃんはきっとわかってくれないだろうけど……。

こんな風に考えたのは多分、未来が見えなくて不安だったから。怖くて堪えられなかった。愛される保証なんかないのに傍にいる自信がなかった。

私の気持ちは萎れていったんだ……。

第27話…ロボット

「お前に決める権利はねえよ。」電話越しにたっちゃんの怒りが伝わって来た。たっちゃんが怒ってる理由は…私が今の関係が続けられないと告げたから。頑張る気持ちも、たっちゃんの優しさがなくなっちゃ萎れてしまう。私に触れないたっちゃんに愛があるとは思えなかった。意地になってるだけじゃないかなって…正直そう思った。

「たっちゃんはいつになったらあたしに触れる？」

「今だって触れるよ。」

「嘘だよ。たっちゃんはおあたしに触ってくれない。」自分で言っ
悲しくなった。たっちゃんはもう私を愛していないんだ、って言っ
たと同じようなことだから。

「お前から触られても拒否しないだろ。」

「あたしはたっちゃんに触りたいって思うから触るよ。たっちゃん
からあたしに触らないのは、触りたいって思わないからでしょ。も
う…愛はないんだよ。」

「なんでお前が俺の気持ち勝手に決めつけんだっつーの。お前は浮
気された側の気持ちわかんのか？」ちょっと早口で低い声で話す…
きつというらしいしてるんだろう。

「あたしだったら今みたいな関係なら別れる。浮気はやっぱり許せ
ないんだって思うよ。」

「…お前は別れたいわけ？」

「…今のままならそのほうがいいと思う。」言うのが辛かった。ま
た、たっちゃんに怒られるのが目に見えてわかった。

「だから、時間くれて言っ
てんじゃん。そんなに焦んなよ。」

「…どのくらい？どのくらい待てばいい？どのくらい待てば前みた
いに触ってくれる？あたし、どんどん自信無くすの。あたしはたっ
ちゃんに辛い思いさせるだけじゃないかって…。」私の声はひどく
弱々しかったと思うけど、言いたいことはちゃんと伝わったと思う。

「お前はそうやって逃げんだべ？」そう聞かれて私は何も言えなかった。そうなのかもしれない、一瞬そう思ったから。だってこんな関係を続けてたら、お互い病気になっちゃうし…楽しいと思えないのに一緒にいるなんて変じゃないのかな。

「別りたいのか？」

「それは、私が言う立場じゃないよ。」

「つーことはそう思ってるってことだな。」たっちゃんは深いため息をついた。私は肯定も否定もせず、ただずっと黙ってた。暫く沈黙が続いた後、たっちゃんは

「わかった。」と言った。つまりそれは別れるってこと。私たちはこれで終わってしまうんだ。

「お前がそう言うなら…」その後の言葉は私にも想像できた。でも、たっちゃんはその言葉を言えずに何度もため息をついていた。その言葉を言ってしまったら終わりだから、言うのが辛いんだろう。怖いんだろう。

私もきっとこんな状況だったら言えなくなってる。あと一步のところで言葉が詰まって出てこないんだ。

たっちゃんのため息を聞いていたら、なんだか苦しくなって私は静かに泣いた。一緒にいた時間が長いから、たっちゃんが今どれほど苦しいか解っちゃうから。たっちゃんも本当はわかってるんだ。こんな関係を続けてたってお互いのためにならないって。だけど、だからって『別れる』という答えを選べない。私たちはきっと依存し過ぎたんだ。

「…やんだよ、俺。そうやってすぐ投げださねえで支えてよ…」たっちゃんは小さい声で、でも精一杯そう言った。私は凄くびっくりした。だってたっちゃんが私に頼ってきたことなんてなかったから。私は1年も付き合ってた、たっちゃんの弱い部分なんか知らなかったんだ。

自分が情けない。今までずっとたっちゃんに甘えてきたのは私で、たっちゃんはきっと私を支えるため精一杯強がって、大人ぶってた

んだろう。私はたっちゃんに支えられるのが当然だと思い込んでた。人間支え合わなきゃ生きていけないのに…私はたっちゃんにしてあげてないんだ。

「ごめんね、たっちゃん。あたしも頑張るから…だから…たっちゃんもあたしに触れるように努力してくれる？」私がそう言うと、たっちゃんは返事もせずに泣き出した。もちろん大声で泣いてたわけじゃない。でも、私は男の人がこんなに泣いてるのを聞いたのは初めてだ。

泣かないでって言おうとしたのに、私ももう声が出せないほど泣いていた。たっちゃんが泣いたのが悲しかった。苦しかった。たっちゃんが愛おしいと思った。

これが同情なのか、愛情なのか私もよくわからない。でも、たっちゃんが泣くくらいなら私はもう幸せにならなくていい。たっちゃんの幸せのために生きていくロボットみたいなもんでいい。

今度は私がたっちゃんを支えるよ。

第28話..母性本能？

たっちゃんの休みの日、私たちは久しぶりに遠出した。って言うても県内のサファリパークだけど。しかも、そこは想像してたよりしよぼくて：がっかりもしたけど、逆に笑えてしまったほどだ。

たっちゃんはある日泣いたのが恥ずかしかったのか、最初気まずそうに下を向いていた。私はそんなたっちゃんが可愛くて、思わず抱きしめたくなった。こういうのを『母性本能をくすぐられる』って言うのかな？

時間が経つにつれて、たっちゃんも私の目を見て話してくれるようになり、私も素直に笑えた。何故だか暖かい気持ちでいっぱいだし嬉しくて涙が出そうになる。

今、私の中で新しい気持ちが生えてる気がした。

「夜飯何にする？」サファリパークからの帰り、たっちゃんは優しく私に問い掛けた。いや、もしかしたらいつも通りにしゃべってるのかもしれない。でも、自分の気持ちが変わってくると、相手の態度や言葉も変わって見えてくるのだ。

「あ、そっかあ、あっちについたら調度いい時間だね。んー、あたし焼肉がいいな。」

「んだな、今日はリッチに行くか。」わーい、と私が喜ぶとたっちゃんもなんだか嬉しそうだった。

「次はどこ行こうねー。」

「今日はしよぼかったからな。」私はたっちゃんの台詞に笑いながら頷く。

「次はおもしろいところ行きてえけど、ここらへん何もねえからなあ。」

「いいよ、別に。たっちゃんとならどこ行っても、なんだかんだ楽しくなるから。今日だって、結構うちら楽しんでたじゃん。」私がそう言うのとたっちゃんは黙って私を見た。

「何？」

「いや、そう言ってもらえると嬉しいな。最近お前には冷たいことばかり言われてたから。」

「そんなことないよ…。」と言ってみたものの…確かに自分は最近たっちゃんを思いやる言葉がなかったな、と反省した。

「だから、昨日はひなたが頑張るって言うてくれたから、泣いちゃったのや。いや、久しぶりだった、マジで。」沈んでる私を見て、元気付けようとしたのか、たっちゃんは恥ずかしそうに笑ってそう言った。

「じゃあ、あれは嬉し泣き？」

「んー。つか、何か安心したんだな。多分。」

「あたし、男の人にあんなに泣かれたの初めてだったからびっくりしたよ。」

「俺だって泣きたくなかったっの。…恥ずかしいべ。」今になってまた、たっちゃんは顔を赤くした。そんなたっちゃんがあまりにも可愛いもんだから、私はついたたっちゃんの腕にぎゅっとしがみついて笑った。

「運転中だから危ねえ。」たっちゃんはそう言うと、私から無理矢理腕を離れた。

「…。」せっかく楽しくなっていたのに…ショック。私が俯いて泣きそうになると、たっちゃんは急に私の手を握った。

「…危なくないの？」びっくりして私はたっちゃんを見る。たっちゃんから私に触ってくれた…それが凄く嬉しい。

「危ねえけど、ひなたんがむんつけるからな。」そう言って泣いて私の手を、たっちゃんはいっそう強く握りしめた。

第29話：同棲

4月に入り、私はアルバイトで新しい仕事に就いた。そして時間に少し余裕ができ、私とたっちゃんとは同棲することにした。私はたっちゃんを少しでも安心させてあげたかったし、もう喧嘩したり疑ったりするのが嫌だったから。

たっちゃんも私も少しずつ昔の自分達を取り戻していた。こんなことを言っちゃいけないかもしれないけど、一度失いかけたからこそ相手の大切さに気付けたと思う。

もし、私に愛情がなかったとして、同情でたっちゃんと別れないにしても、私は別に不幸せなわけじゃない。たっちゃんの泣き顔を見て、他の人と付き合っていくほうがよっぽど辛い。好きとか愛してるよりもっと大きな気持ちが存在する気がした。そんな言葉見つかからないけど。

最近、副店からメールが来た。正直びっくりしたし、動揺した。いくら私の気持ちに整理がついていても、相手がそうじゃないときもある。

副店は私じゃないと駄目だと言ってきた。けれど私は『副店は私じゃないでも大丈夫。たっちゃんは私じゃなきゃ駄目だから、私は副店を選べない。』と返した。副店からの返事は来なくて、納得したのかどうかはよくわからなかった。だけど私はそれ以上メールを続けることをやめた。相手が納得するまで話すのが本当は正しいことなのかもしれない。けれど私は何度も相手を傷つけるのが嫌だった。何回好きだと言われても、もう私には断ることしか出来ないから。それに、メールをしていること自体、たっちゃんに失礼な気がした。私はアドレス帳から副店の名前を消した。メールも着信履歴も何もかも。

別にたっちゃんに隠すつもりでそうしたわけじゃない。たっちゃんを選んだんだから、副店のことはきれいさっぱり忘れなきゃいけない

いと思った。それが私なりのけじめだ。

副店に謝るのはこれが最後にしよう。

私は心の中で『ごめんなさい』とつぶやいた。

第30話：捨てる

「えっ…」一瞬私の体は固まった。それは、携帯の画面に驚く内容が書かれていたから。

たっちゃんとの同棲の話しが着々と進む、4月後半。元々働いていた店のバイトの子からメールが届き、くだらない話しをしている時だった。『そういえば、副店入院するっぽいよ。』何通目かのメールにそう入っていた。1ヶ月くらいから頭痛が酷くなり、最近になって病院に行ったら『脳に腫瘍ができています』とわかったらしい。そう：1ヶ月前は私がたっちゃんを選んだ時だ。そういう病気はストレスでもなるんだろうか。もしかして私のせい…？

私は最後の台詞を思い出した。『副店は私がいなくても大丈夫』確かにそう言った。それは、私の勝手な判断。

副店は他の誰かでも大丈夫な気がした。副店は私がいなくてもひどく傷ついたりはしないだろうと。もし、この病気が私のせいだとしたら、私はどうするべきなんだろう。

どのくらい酷い病気なのかはわからない。だけど、心配だった。すぐにでも連絡を取らなきゃと思った。でも、私にはかけてあげる言葉なんて何もない…。

茫然としていた私はドアの開く音で、はっとした。

「ひなた、全然進んでねえべー。」手にジュースを持ってたっちゃん、やれやれと笑った。

「ごめん、メールしてたら夢中になって。今から急いでやるから。」

私は携帯を鞆に突っ込んで、たっちゃんの部屋を片付け始めた。

これから一緒に住むために、今日はたっちゃんの部屋の荷物をまとめに来た。

「あっ、これ…」私が見つけたのは、テレビの下に置いてあった何通もの手紙。記念日に私が書き続けた手紙だ。

「たまに読み直したりしたー？こんなところに隠して。」

「読んでたよ。何回も。」

「本当にー？」私はいやらしく笑って手紙を開いた。そして気付いた。たっちゃんが何度も読み直していたこと。きっと、私が浮気を告げたとき。

手紙には涙の跡が残っていた。少しシワが寄ってて、握り絞めたようになっっていた。

手紙に目を通して思う私も泣きそうになった。

素直に永遠を誓っていた頃。何の疑いもせず、ただ2人の幸せを願っていた。手紙の最後には必ず『大好きだよ』と書かれていた。

こんなこと書かれていたら、私が浮気するなんてちっとも考えられないだろう。たっちゃんは、信じてた人に裏切られてすごく傷ついたんだ。私も信じてた人に裏切られる辛さは知っている。

たっちゃんは強いね。

「もう、この手紙に嘘はないよ。ずっとたっちゃんの傍にいる。」

私がそういうとたっちゃんは力いっぱい私を抱きしめた。不安を打ち消すようにすごく強く。

大切なものがいくつもあったとき、やっぱりそれはどれかを捨てなきゃいけないときもある。誰だって全てを失いたくないだろうけど……。

私はたっちゃんだけを幸せにする。もう、副店を幸せにしてあげれる力はないんだ。どちらかを捨てるしかないなら、私は副店を捨てる。

だから、ただ病気が酷くないことを祈る。副店を誰かが支えてくれることを願うよ。

第31話..もやもや

「おはよ。」

「んー、おはよー。」 たっちゃんは眠そうに目を擦って、私にキスをした。

桜が綺麗に咲き誇る今日、私たちは同棲1日目を迎えた。2人とも休みで起きたのはお昼近い11時。私のご飯を作っていると、たっちゃんはふらふらと歩いて私の隣に来た。

「どうしたの？」

「俺も手伝う。」

「いや、無理でしょ。」 私は笑いながらたっちゃんのほっぺをつねる。 たっちゃんは唸りながら部屋に戻り、ソファーに寝転んだ。

温かいなあ…。 体も心もすごく温かい。 毎日たっちゃんの傍にいれる。それが私の幸せ。 たっちゃんの幸せそうな寝顔が見れる。それも私の幸せ。

でも、ただ1つ心にひっかかっていることがあった。それは、副店のこと。 どう頑張っても副店の彼女にはなれないけど、やっぱり気になる。

私の勝手な行動のせいで副店の人生を狂わせてしまったとしたら…そう考えると気分は重かった。 私はきつと副店に『お前のせいじゃない』 って言っってほしいんだ。 そしたら私は何も考えず たっちゃんの傍にいれるから。 自分だけ幸せな道を選んできましたから、副店に対して罪悪感があった。 そういうものから開放されないと、本当に幸せにはなれない気がする。

結局また自分のことばかり考えてる…私ほもっと人のために頑張れる、人の幸せのために自分を犠牲にできる人間になりたい。

どれだけの人を傷つけてきたんだろう。 なんだか自分だけ幸せになっってずるい気がした。

このもやもやした感じがすごく嫌だ。

「ひなたー。お腹減ったよー。」

「あ、はいはい。」私は出来上がったオムライスを運んだ。もやもやを吹き飛ばすように笑って。

第32話：運命のいたずら

4月最後の日。

偶然なのか必然なのか、運命のいたずらなのか。：私は会いたくても会いたくなかった人に出会った。

本当にただの道端で、なんの約束もしていないのに会うことなんてあるんだ。：お互い立ち止まってただ見つめ合っていた。距離は3メートルくらいだっただろうか。

散々言いたいことがあつたくせに、私は何も言えずにただ副店を見ていた。副店に真っ直ぐ見つめられると、全て見透かされそうで怖い。

なんで黙ってるの？病気はどうなったの？

私は心の声で問い掛けた。もちろん、返事はないけど。

なんて声をかければいいかわからなかった。どんな言葉なら副店を傷つけずに済むか、副店はどんな言葉を待ってるのか、全然わからなかったから。何か言わなきゃって考えれば考えるほど、どうして言葉ってやつは出てこないんだろう。

一体どのくらいの時間お互い見つめ合っていたんだろうか。だんだん息苦しくなってきた。

副店の目は私を責めるようにも見えないし、愛しい人を見る目でもなかった。なんの感情もこもっていない、無関心な目だった。

謝りたいけど、そんなのはきつと自己満足だろう。どうしようもなくなつて：先に目を反らしたのは私だった。

そして副店は俯いてる私の横を、何も言わずに通りすぎた。変わらない匂いがした。

本当にごめんなさい。こんなとき謝れる私じゃなくて。こんなとき笑える私じゃなくて。

ただ目を反らした私は本当に子供だ。

私の目からは冷たい涙が流れた。静かにすうっと地面に落ちていく。

周りの人に見られないように、私は下を向いたまま歩き出した。
何も言わずに通るすぎた、それが副店の優しさだったと思う。泣い
てる私の横を副店の車が通りすぎた。マフラーを響かせて。
マフラーの音に掻き消されるほど小さな声で、私は
「ありがとう。」と言った。

第33話..晴天

一緒に住んでから約1ヶ月が経った。

まるで昔から一緒に住んでいたみたいに、私の中でたっちゃんとの同棲はすごく自然。

細かいことで喧嘩はするし、まあ、そこら辺は昔と変わらないけど。最近、成長してないなあ、と反省すること多い。でも、私たちの気持ちは確実に昔よりも成長してるんじゃないかな。いろんなことを乗り越えて来た分、もっとお互いを愛した。これからだってきつと、もっともっとたっちゃんを愛していくんだろうな。

副店のことは前ほど気にならなくなった。無理矢理押し込めた部分も有るかもしれないけど。とりあえず私には副店にしてあげれることなんてないんだから、同情なんて良くないと思った。

そして副店とのことで私は思った。やっぱり積み重ねてきた愛っていうのは凄いつて。

副店に出会うまで、私はたっちゃんと色んなことを経験して、2人で乗り越えて来た。そうやって時間をかけて、私たちは私たちなりの愛を作ってきたんだと思う。

副店との間で気持ちが揺れたとき、たっちゃんとの愛は完成が近くて...それを壊してまで新しい愛を作る勇気なんて私にはなかった。たっちゃんとの愛なら綺麗に出来る上がる自信があったから。

たっちゃんを選んだのはもちろん愛もあったと私は思うけど、過ごして来た時間の大きさや思い出が何よりも強かった気がする。そういう時間があったからこそ、今一緒にいる時間が温かく感じれると思う。

「たっちゃんと一緒にいると幸せ。」ソファーに並んで座っていた私は、突然そんなことを口走った。

「ちょ、ちょっと嬉しかっただろおー。」なんだか言った自分が恥ずかしくなって、照れ隠しに私はそう言った。

「そんなこと言ったら、これから毎日幸せだぞ？ ひなたは俺の嫁さんになるんだから。」 たっちゃんは腕を組んで得意げに言う。

「え、勝手に決めないで下さーい。」 また恥ずかしくなって、つい可愛くないことを言ってしまった。 そんな自分にため息が出る。

「…俺と結婚すんでしょ？」 たっちゃんは突然真面目な表情になった。

「…え？」

「結婚して。 ひなた。」 たっちゃんの優しい問いかけに私は返事をしなかった。 だって…嬉しくて涙が止まらなかったから。

「こんなときにプロポーズ？」

「お前が突然そういう話し始めたんだろ。」 たっちゃんはティッシュで私の顔を乱暴に拭く。 そんな仕草からたっちゃんが照れてるのが伝わった。

「なんだひなた、返事は？」

「…はいっ。」 私は涙をぼろぼろこぼしながら笑った。 たっちゃんも少し涙ぐんでるように見えた。 …見間違いか？

結婚式はまだ未定。 でも、確実に私たちは結婚する。 私には見えてるんだ。 たっちゃんと私の未来が。

5月17日。 今日晴天。

私は白いセーターを着て笑っている。 …少し暑いけど。

第33話：晴天（後書き）

とりあえず完結いたしました☆まだ、仲良くやっていますが、先が長いのでとりあえずここで：（UεU○）　今まで感想をくれた皆様、読んでくれた皆様ありがとうございます！！　また違う話を書いていたらなあと思います（＊6▽6）その時はまたよろしくお願ひします♪〃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4770b/>

白いセーター

2010年10月20日23時29分発行